



きらきら☆いわてっこ

自分のイメージを友達に伝え、相手の考えと合わせ ていくこと、そのむずかしさを経験した活動

訪問支援で訪れたとある園の5歳児の様子についてのお話です。冬をテーマにグループごとに部屋の飾りを作ることになりました。「みんなで作って部屋に飾ったらすてきだね！」そんな思いで話し合いがスタート。雪だるまや雪の結晶など作りたいものの意見が出され、材料や作り方はどうするか、各々が自分のイメージしたことを伝え始めました。

あるグループでは、紙コップで立つ雪だるまを作るか、紙に描いて切った雪だるまにするかで、意見が分かれました。最終的にどっちも作ろうということになりましたが、話し合いには時間がかかりました。友達の仲立ちをしようとする子の存在もありました。保育者は、友達同士で自由に話せる環境を作り、見守りながら言葉での伝え合いの場面の援助をしていました。

最初は自分と違う考えを受け入れられず不満げな表情の子もいましたが、作っていくうちにイメージが共有でき、自分のアイデアを出し工夫しながら作ることを楽しみました。そして、みんなの作品が完成しました。床に仰向けになって天井や壁に飾った作品を見ていた子どもたち、その表情から達成感と満足感が感じられました。



A児とB児の作りたい物の意見が合わず、納得するまでに時間がかかりました。間に入って「こうなの？どう作るの？」と質問しながら、イメージを確認しているC児。年長児の言葉の伝え合いの大事な場面です。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。



仲間の考えを受け入れて、工夫しながら作っているうちに楽しくなってきた様子。この後、最初から作りたかった雪だるまを描いて切って、完成させました！

言葉による伝え合いは、領域「言葉」などで示されているように、身近な親しい人との関わりや、絵本や物語に親しむ中で、様々な言葉や表現を身に付け、自分が経験したことや考えたことなどを言葉で表現し、相手の話に興味をもって聞くことなどを通して、育まれていく。(中略)

こうした幼児期の言葉による伝え合いは、小学校の生活や学習において、友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりしながら一緒に活動する姿や、自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする姿などにつながっていく。特に、戸惑いが多い入学時に自分の思いや考えを言葉に表せることは、初めて出会う教師や友達と新たな人間関係を築く上でも大きな助けとなる。

—幼稚園教育要領解説 P70 保育所保育指針解説 p80 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 P64 から抜粋—



令和6年度 訪問支援アンケートについて

今年度は、前後期合わせて 111 回(予定含む)の訪問となっております。訪問後には、各園からアンケートを提出していただいております。「他園ではどんなことを書いているのですか」と、質問を受けました。そのような声もあり、アンケートを一部共有し、より訪問支援について知っていただけたらと思います。

■保育者 【有意義だったことや参考になったこと】

🏠読み取った姿を共有すること

幼児の姿の読み取りをみんなで共有することで視野が広がりました。様々な視点から保育の振り返りを行い、翌日以降の保育へ活かしていきたいです。年齢に応じた援助の仕方への助言をいただき、幼児の様子から発達段階の理解を深めて、適切な援助や関わり方を考えようと、自分の保育を見直すきっかけとなりました。(こども園)

🏠子どもの「やりたい」を引き出す

保育をしていく中で子どもたちの「やりたい」という気持ちを引き出していくこと、お互いのやりたいことが形になることの大切さを改めて強く感じた。その瞬間瞬間で子どもたちの気持ちは変わっていくということを保育者は受け止め、興味があることはとことん追求できる環境を保障していきたい。(こども園)

■代表者 【園として、保育者のどういうところを伸ばしていきたいか】

🏠職員みんなで意識していきたい

カンファレンスの内容について、園内研修で「今回の研修で学んだことを実際にどう保育に生かしていくか、実践していくか」「何から始めるか、何ならできるか」を職員で話し合いたいと考えています。質問したことがそのクラスのことだけでなく、園職員全てに関係あるんだということ、職員みんなが意識して取り組んでいくんだ、ということを確認したいと思います。(保育園 園長)

🏠保育者の主体性も伸ばしたい

子どもや保護者への関わり方や日々の記録、保育や行事に向けての準備など、忙しさや悩みなど保育の仕事って大変と考えることも多々ありますが、自分が子どもに関わったことで、こんな育ちの姿が見られたなど、発見や気づきを通して「保育が楽しい」「もっと子どもたちのいろいろな姿を見てみたい」と、子どもの主体性だけではなく、保育者一人一人の主体性も伸ばしていきたいと思います。(こども園 園長)

コラム—主体的に環境に関わること—

「主体的」

ある活動や思考などをなすとき、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま。

「主体性」

主体的であること。またそういう態度や性格であること。(広辞苑より)

子どもの主体性について、訪問支援で何う園の先生方と考え合う機会が多くなってきました。園内研修のテーマとして取り組み、日々の保育を振り返り、「こどもまんなか」(こども家庭庁)を考え、自園における教育・保育を見直すという意欲的な姿勢が感じられます。今回は3要領・指針を参照しながら考えてみたいと思います。

「幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。」(幼稚園教育要領解説 P28 参照)

【補足】幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 p 28 参照 保育所保育指針解説 P15 参照

幼児教育の基本である「環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである。」(幼稚園教育要領解説 P29 参照)このことを理解しつつも、子どもが主体的に関わりたくなる環境とはどうすればいいのか、常に難しさを抱えているのが現状です。

「保育において子どもの主体性を尊重することは、子どものしたいようにさせて保育士は何も働きかけないようにするというのではない。」(保育所保育指針解説 P 38 参照)と示されているように、目の前の子どもが、何に興味をもち、何に関心をもっているのか、乳幼児期の発達の特性と一人一人の実態を踏まえ、保育の環境を計画的に構成することが重要です。そして、子どもが自分から関わろうとする魅力ある環境構成を考えていくこと。このことは、日々子どもに寄り添い、子どものよき理解者として同じ目線で見たり考えたりすることで、具体的な手立てが見えてくるのだと思います。

各園での、子どもの主体性を育む保育への取組の姿勢は、子どもの“やってみたい”という意欲を高めることにつながるのではと思います。保育者は、その思いに応えられるよう、常に子ども理解に努めていきたいものですね。(注) 解説等の太字は、いわて幼児教育センターによる